HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ヒトラーのウィーン（２）　ーカール・ルエーガーとその市政ー
Author(s)	田口, 晃; TAGUCHI, Akira
Citation	北大法学論集, 43(6), 131-147
Issue Date	1993-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/15506
Type	departmental bulletin paper
File Information	43(6)_p131-147.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

論説

ヒトラーのウィーン（二）

―カール・ルエーガーとその市政―

田口　晃

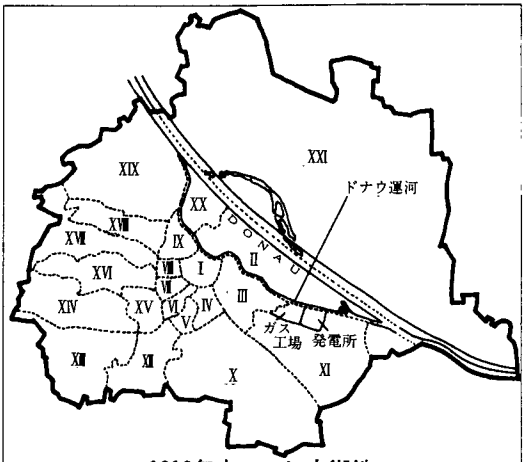
目次

はじめに
第一節　カール・ルエーガーの生い立ち
第二節　キリスト教社会党の抬頭と市長ルエーガーの誕生
第三節　ルエーガー市政の展開
第四節　キリスト教社会党市政の限界
おわりに

（以上四〇巻五・六号）
（以上本号）

第三節　ルエーガー市政の展開

先に見たように、ウィーン市は一八九〇年に郊外地区と合併し、それまでの人口七〇万から人口一〇九万を擁する大ウィーンとなった。しかし、大ウィーンとは名ばかりで、九三年に下町と郊外地域を隔てていた外壁＝リーニエが撤去された以外、みるべき改善はなく、交通網をはじめ、都市の生活基盤は著しく整備が立ち遅れていた。(1)



1910年ウィーン市街地

そうした中で、一八九七年七月二〇日、晴れて市長となったルエーガーは、その就任演説において、市長としての彼の政策目標を、基盤整備を中心に、列挙している。(2) 無論、病没という事情もあって、その全てが彼の在任中に実現したわけではない。そこに示された方向に沿って、実質的に市政の梶取りを始めた前年度から、一九一〇年のその死までの一四年間に、彼が指導して進めたウィーン市政の新たな諸成果は、これを大きく二種に分けて考えることができる。一つは、大ウィーン市民の共通の生活基盤整備に関わるものであり、ルエーガー市政にあっては同時に市の経済運営にとって重要な意味を持つ分野である。F・チャイケ教授に倣って、これを「経済政策」と呼んでおこう。(3) 今一つの分野は、主として小市民や貧困層を対象とする「社会・福祉政策」と呼ぶべき諸政策である。その二分野のうち、本節では「経済政策」を展望し、続いて次

節において「社会・福祉政策」を取り扱うことにする。

「経済政策」に分類すべき第一のものは、市営ガス事業の開設である。当時のガス需要は、家庭での利用が始まったばかりで、主体は専ら街路照明であった。ウィーン市の中心部の照明は一八三五年以来民間企業に委ねられており、自由主義市政も勿論それを受けて、七七年に、イギリス資本の「国際・大陸ガス会社」（ＩＣＧＡ）と二二年間の供給契約を結んでいた。そしてこの間、質、価格の点からこれを批判して、八四年以来市営化を主張するルエーガー派に対し、八九年に、自由主義派の市議会は、予定通り九九年一〇月三一日までは契約を継続する決議を行い、その際契約延長の可否を九六年一〇月末日までに決めることも定めている。つまり、ルエーガー派が多数を制した九六年七月段階では、三年後の契約期限切れを控えて、市は早急な態度決定を迫られていたのである。(4)

同月、早速市議会はルエーガーの年来の主張通り、ガス事業の市営化を決定した上で、既存設備の買収と新工場建設、両様の可能性を検討する特別委員会を設置した。そして、その後、買収交渉が決裂すると、延長契約期限のおしつまった一〇月に入って、ルエーガーは、市独自のガス工場新設案を市議会に上提し、激しい反対をおしきって、延長決定期限切れ直前の二七日、これを成立させている。(5)

「プラハで既にやっていることが、どうしてウィーンでできないのか。」という彼の主張に対する反対論は、専ら技術的に可能か否か、という問題と財政問題とに絞られた。(6) 技術的には、ガス工場建設特別委員会の任命したＦ・カパウン博士らの尽力で、最新の傑れた設備と新たな配管網とが計画されて実現可能となったのに比べ、難問は財源であった。自由主義市政時代以来、既に六五〇〇万クローネの負債を負っているウィーン市に対し、(7) その上、ガス施設建設予定費用六〇〇〇万クローネの借款を与えようとするものは国内にはいなかったのである。反ユダヤ主義を高唱するルエー

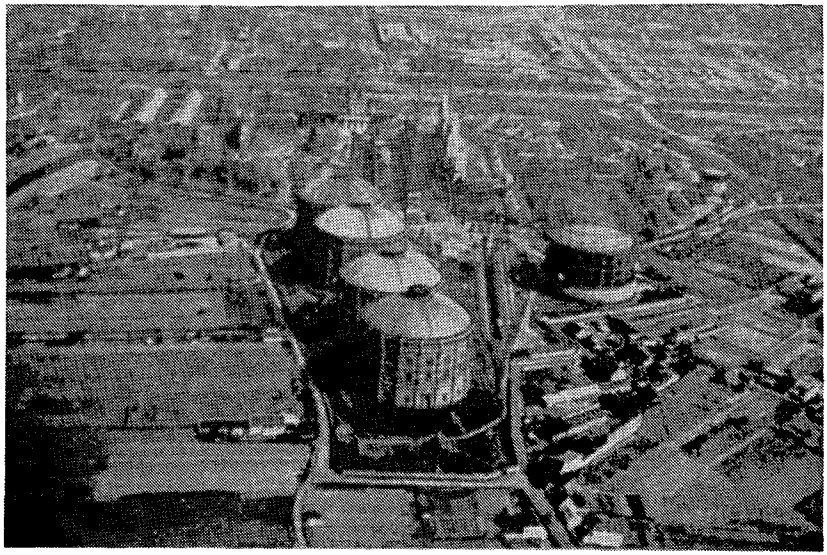
ガーに、ユダヤ系を主流とするハプスブルク帝国内の金融界が冷淡であったという事情も加わった。[8]

更に国外でも借款の引き受け手が仲々みつからず、反対派の新聞がウィーン市の破産を書きたててルエーガーの心労が募る中、漸く九八年一月、ベルリンの「ドイツ銀行」が、四・二五％の利率で引き受けてくれることに決まった。これは、将来、ウィーン市の市内交通を電化する際、ジーメンス・ハルスケ社に請け負わせることを条件に、ウェルナー・ジーメンスが同系列の「ドイツ銀行」に仲介したお蔭であった。[9]

かくして、第XII区（シンマリング）の東部鉄道とドナウ運河の交錯する地帯に四基のガス・タンクと最新設備を擁し、年間八六〇〇万m^3のガスを供給する工場が建てられる運びとなった。又、旧市内では新たにガスの配管工事が進められた。[10] そうして、予定通り、九九年一〇月三一日から、市営工場によるガス供給が開始され、リング大通りの照明は見違えるようになった。[11]

ガスの問題については、社会民主党の「労働者新聞」が当時指摘したように、ＩＣＧＡの旧設備を買収した方が安上がりであった。しかし、同じく「労働者新聞」が看破しているように、大ウィーン市長としての最初の大事業として、又、公益に関わるものは公的機関が扱うべきだという、彼の考える都市経営の重要な一環として、さらにはユダヤ資本との闘いとして、政治的、象徴的に極めて重要な意味を持たせていた以上、たとい高額であっても、最新技術を誇る市独自のガス工場新設にルエーガーが強く固執したのは怪しむに足りないのである。[12]

続いてルエーガーが取りかかったのは、交通網の市営化と整備であった。ウィーンの市内交通は、それまで、旧市内については六八年以来「ウィーン路面交通会社」（ＷＴＧ）が、又、新たに編入された郊外地区では七三年以来「新ウィーン路面交通会社」（ＮＷＴＧ）が、それぞれ、市との契約に基づき、独占的に取りしきってきた。両会社の路線は、一



手前がガス工場、左上の煙突が発電所

八九七年には、延べ一一二キロにも達していたとは言え、そのうちの一一〇キロは馬車によるものであって、非能率で連絡も悪い上、料金も高く、市民に不評であった。[13] しかも、苛酷な労働条件と低賃金のせいで、被雇用者の側からの不満も強く、九七年の聖霊降臨祭にはＷＴＧのキリスト教社会党系労働者がストを打つに至っている。[14]

そうした中で、市が動き出し、市によるＷＴＧ社買収の噂が広まってＷＴＧ社の株価が上昇すると、ルエーガーは市議会の場で、一度は、公式に買収の意図を否定している。そして、その結果株価が暴落するのを待って、今度はそれをジーメンス・ハルスケ社に買い占めさせたのであった。[15] そして、八月に入ると、同社がウィーン市に対して、合弁会社を新設の上、電化と路線拡張を行なうことを提案し、若干の試験期間を置いて、九八年一一月に両者は合意に達している。そうして結局、九八年一二月ＷＴＧ社が清算し、九九年九月には合弁会社「市路面電車建設運営会社」に全てが委ねられることになる。さらに、一九〇二年四月に入ると、同社の所有が市に帰することが決定され、同時に郊外地区のＮＷＴＧ社の買収も行われた上で、三年七月には到頭経営も全て市が

負担することに決まり、ここにウィーン市内路面交通の市営化が完成を見たのであった。[16]

電化作業は九八年一月のヴァルガッセ＝フォアガルテン線をてはじめに、順調に進められ、旧市内に関しては、一九〇二年初頭までに、全線で完了した。[17] 次いで路線の拡張が相次いではかられ、当初四〇路線だったものが、一〇年後には六四路線、延べ二一四キロとなっている。さらに、郊外との連絡路線も九から一六と略々倍増し、郊外地区の交通の便が格段に改善された。[18] そのほか、料金体系の合理化や時刻表の整備も進み、ウィーン市は「ヨーロッパで最も整備された市電網」を誇るようになったのである。[19]

市電の整備と密接に関連しているのか、平行して進められた発電所建設である。当時、ウィーンの電力供給は三つの民間会社が行っていた。これに対し、市内交通電化で新たに必要となる電力に関しては、新設の市営発電所の独占的供給が市議会で決定された。しかもその上、照明等、市電以外の一般用途向けの電力についても、公的機関としての市が扱うべきことが市議会で論ぜられ、これも決定された。そうして、三電力会社の買収が不調に終った一九〇〇年六月、市営ガス工場の隣接地に、まず、市電用の発電所建設が着手され、次いで同年一二月一般利用向け発電所の工事が、いずれもオーストリア・ジーメンス・シュッケルト社の手で、始められている。市電用発電所は、出力一二〇〇〇KW規模のものが、一九〇一年一月に落成し、市路面電車会社と「一般オーストリア電力会社」との契約期限の切れた同年四月から稼動したし、当面五〇〇〇KWの出力を持つ一般消費向け発電所も、同年八月には完成した。[20]

既存の三電力会社にとって、市営発電所の出現は脅威であったが、とりわけ、最大の大口顧客である帝国政府諸機関への電力供給を、市営の一般消費向け発電所が独占するようになると、民間三企業の劣位は弊い難くなった。[21] さらに追い討ちをかけるように、市側は営業許可更新の際の市の先買権を認めさせて、これを続々に実行に移していった。その結果一九一四までには三社とも買収され、ウィーン市による電力事業独占が完成を見ている。[22]

都市の生活基盤を整備し、且つ市の財政運営の転換をはかるルエーガーの「経済政策」の中で最大規模を誇るものは、巨大な上水道建設工事であった。前世紀末のウィーンの飲料水の事情はと言えば、九一年の大ウィーンの出現とその後の人口増加によって極度に逼迫しており、既に使用を停止していたドナウ河沿いのフェルディナント皇帝上水道を、水質上問題が残るにも拘らず、再開せざるを得ないような有様であった。(23)

その為、ウィーン市議会は、自由主義市政時代の九三年から既に検討委員会を設けて調査を行っていたのである。そして、九九年までに、それまであげられていた複数の候補地のうちで、シュタイアーマルク州のザルツァッハ川の水源地が、水質もよく、且つ水利権がいりくんでおらず買収が簡単であることが判明した。これを知ったルエーガーは、九九年五月、旅行を口実に、潜かに所有者のアトモント修道院を訪れ、全くの独断で契約を締結して、市議会にその事後承認を求めた。この独断専行には流石のルエーガー派の市議会議員たちも驚き、不満をもらしたが、ルエーガーは意に介さなかったと言う。(24) ウィーン市議会は、結局、一九〇〇年三月二七日、第二上水道の建設工事を、一九一一年完成の予定で決定している。(25)

一九〇〇年八月から、当時可能であった殆んど凡ゆる技術を駆使し（隧道七七キロ、アクア・ダクト一〇〇箇所、サイフォン一九箇所等）延々二〇〇キロにわたる一〇年掛りの上水道建設が工事に入った。水量は一日二〇万キロ立法メートル。平行して、水を各家庭に供給するための配水設備も、主として郊外地区を対象に整備され、配水管は一八九九年には全長七〇〇キロに及んだし、貯水池や給水塔も新設された。(26)

工事の完成は一九一〇年一二月のことであって、同年三月に死去したルエーガーは、結局、生前楽しみにしていた竣工式には出席できなかった。ともあれ、今日、ウィーン市民が上質の飲料水を夏でも充分に享受できるのは、この第二

上水道に依る所が大きく、後世、これをルエーガー市政最大の功績を評する声も多いのである。[27]

序でに下水道についても一言しておけば、一八三〇年代から開始されたウィーン市の排水路整備は、この時期、旧市内に関しては最終局面に入っていた。けれども、新市域である郊外地区では未だ一七〇キロ程しか整備されておらず、極めて不十分であった。そこで、ルエーガーの時代に一二年計画で、ウィーン河に沿った主下水道を上流に延長し、ウィーン河にそそぐ沢山の支流に包いをしてつなぐ広範な下水道網が作られることになった。又、八一年からの計画であった、ドナウ運河沿いの主下水道も、一九〇二年には完成し、運河の汚染が回避されるようになっている。[28]

そのほか「経済政策」の中に含めて考えられる事業としては、レストラン経営、ビール醸造所、屠殺場、食料品市場等があげられよう。

〇五年六月、市議会はランナースドルフにある倒産したビール工場の買収を決定している。これは市庁舎の地下に開設された市営レストランへのビール供給に配慮した措置であった。[29] ところが、レストランが繁盛して、そこで供される下オーストリア州ワインの評判が高まったのとは対照的に、ビールの売れ行きは一向に伸びず、醸造所は赤字続きであった。[30]

一方、市民への食料供給を安定させることも市政の重要課題と考えていたルエーガーは、まず、〇四年に食肉の価格が高騰すると、その価格安定を目標に〇五年一月、市営の大屠殺場建設と食肉購入局の新設を市議会に提案し、承認させている。その内容は、具体的には、Ⅲ区（ラント・シュトラーセ）にあるザンクト・マルクス屠殺場を拡張するとともに、各区に食肉小売スタンドを設ける。というものであった。[31] しかし、当然のことながら、これはルエーガーの支持層であった市内の食肉業者の利害と抵触し、強い反対に遭わざるを得ない。そこでルエーガーは、「狙いはユダヤ人の

富豪である特権的家畜販売業者に対抗することにある。」と強弁する一方、小売スタンドの数は減らすことになった。[32]

さらに、魚市場、野菜市場、果物市場の整備も進み、〇六年五月には総工費九二万クローネで中央卸売市場がⅢ区に新設された。庶民の食料調達の場として人気の高いナッシュマルクトもこの時期に拡大整備されている。[33]

最後にこの分野で逸することのできない事業は、貯蓄銀行の創設であろう。〇五年四月、Ⅰ区で開かれた選挙人集会の席上、ルエーガーは市営貯蓄銀行の新設を提唱し、その際「この銀行の設立によって、現在ウィーンで行われていることの全てが完成する筈だ。」と述べているからである。[34]

ルエーガーの演説を受けて、〇六年一〇月、市参事会が、市の部局案に基づく原案を市議会に提出している。その際、副市長ボルツァーの趣旨説明に対し、キリスト教社会党の市会議員グリューンバックが「我々は大いに期待している。何故なら、この貯蓄銀行を通して、市民が節約と資金の有効利用の機会を手に入れるだけでなく、小営業層に対して低利の融資が可能になるからだ。」と述べているのは、この事業の狙いを適格に把握していると言うべきであろう。[35]

かくして「ウィーン市中央貯蓄金庫」は一九〇七年一月一日から、当初二〇万クローネの原資をもって開始されることになった。開庫の祝宴の席では上機嫌のルエーガーは、「貯蓄金庫はウィーン市の最も重要な施設である。そこで最初の支店は我が友シューマイアーの為に第XVI区（オッタクリング）に開くことにしたい。」と述べ、加えて「ガス工場建設以来進められてきたウィーン市の独立は、今こそ金融の分野にも及び、そしてここで完成する。」と意気軒昂であった。[36]「独立」とは内外の大金融資本、即ちユダヤ資本からの独立の意であり、従って冒頭で引用したヒトラーの評価は、ルエーガーの意図は汲みとっていることになる。その後、各区に次々と、区代表の監督下におかれる支店を開設して、小市民の箪笥預金を吸収する一方、金庫内に設けられた営業者信用協会を通じて「創造的企業」(Schaffende Gewerbe)[37]

つまり小営業層に低利な貸付を行った。[38] とは言え「中央貯蓄金庫」の活動は、小口の高利貸を除けば、ユダヤ系金融資本の勢力を弱体化するような性質のものではなく、その点ではヒトラーの評価は極めて不正確である。

以上、やゝ詳細に「経済政策」分野でのルエーガー市政の業績を追ってきたわけであるが、我々はこれを、歴史的に、どのように分析し評価することができるであろうか。

先に引用した「公の利益に関わる事柄は、公の機関によって行われるべきだ。」という、ルエーガー自身のウイーン市長就任演説の一節と、こうした巨大な成果とを照らし合わせて見る時、これは、何よりも先ず、一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけて、殆んどの工業世界を席捲した、所謂「都市社会主義」の一つ、それも最も大規模な事例とみなすことが可能である。[39] 勿論、元来が自由主義派の一員として政治活動を始めたルエーガーであるからして、出発点から「都市社会主義」を構想していた筈はない。それが、自由主義市政の腐敗批判を重ねる過程で、とりわけI・マンドルの影響の下で一九八二年以後は、はっきりとガス自治体経営論に傾いた。[40] そして、マンドルが、専ら、汚職等腐敗の根源になる私企業と市職員の癒着防止の観点から、これを主張していたのに比し、ルエーガーにあっては、ガス供給が市営事業として、市の独自財源になりうる点が強調されている。[41] こうしたルエーガー独自の自治体経営的視点は、一八八二年の「リンツ綱領」において、北部鉄道の国有化論を収益への考慮に基づいて主張していたシェーネラー派の影響によるものであろう。[42] ともあれ、ウィーン市の財政構造は、ルエーガーの「都市社会主義」の下で、自由主義市政時代と性格を変え、例えば、これ又一九〇八年の例で見ると、歳入の一六%を市営業の収益が占めるまでになっている。[43]

しかしながら問題は残った。こうした「都市社会主義」の原資が全て借入金だったからである。一八九八年、ガス工場建設を目的とする六〇〇〇万クローネを皮切りに、一九〇〇年には発電所建設用に三〇〇〇万クローネ、〇二年には

市内交通電化と第二上水道建設の為に二億八〇〇〇万、更には〇八年に投資用として三億六〇〇〇万クローネと、次々と膨大な借款が雪だるまのように増えており、その結果、先の〇八年の財政で見ると、利子負担（元本返済は含まず）だけで六一二万クローネ、実に歳出の二八％を占めるところまで財政赤字が昂進していたのであった。(44)

抑々「都市社会主義」においては、資金の稔出はどこの国、どこの都市でも困難な課題であった。例えば、「都市社会主義」の最初の典型例とされる、イギリスのバーミンガム市の場合、改革以前の市政はR・コブデンが嘲笑的に呼んだようなShoppocracy（小商店主層の支配）下にあり、改革の構想力は無論のこと、巨額な資金を動かす決断力も欠いていた。漸くJ・チェンバレンに代表される、改革派にしてかつ国際貿易の経験に基づく広い視野と決断力を持った人々が市政を掌握して、初めて「都市社会主義」が可能になったとされている。(45)

翻って世紀転換期のウィーン市政を見ると、市議会多数派を形成していたキリスト教社会党のメンバーは、一部に大商人や高級官吏を含むとは言え、大多数は小営業層であって、市議会について見る限り、まさにShoppocracyそのものと言ってよかった。(46) 従って、ツケを後世にまわして目前の改善を優先する古今東西不変の傾向はここでも見られるにしても、それを越えて、巨額の資金を、しかも借款の形で背負いこむ決断を、市会議員だけの判断で下し得たとは思われない。

Shoppocracyのウィーン市議会をして、かくも大胆な決定をなさしめた所以のものは、何よりもルエーガー自身のイニシアティヴであった。(47) 彼は、ウィーンがハプスブルグ帝国の首都として、他の帝国内の諸都市、就中ブダペストとプラハの追随を許さぬ都市機能を持つことに異常な執念を燃やしており、そこに首都の市長としての己の最大の責務を見出していたのである。(48)

しかし、勿論それだけではない。ルエーガーは王位継承者フランツ・フェルディナントに近い立場に立ちながら、自

己の宰相就任の可能性も含めた、ハプスブルク帝国全体の新構想を胸にしていたのであり、ウィーンも又、その中に位置づけられていた。それが即ちウィーン四〇〇万都市構想である。繁栄する人口五〇〇〇万の大帝国の首都として、ウィーンは五〇年後には四〇〇万の人口を擁する巨大都市に発展する筈であり、その為には、大規模な都市基盤の整備が今から必要だと考えられていたし、更には、当面の巨額の借款も、いずれは返済が可能になる筈だったのである。[49] そこに、ルエーガーが市財政の赤字に殆んど頓着しなかった秘密がある。

ウィーンの「都市社会主義」が、かくも徹底し得たについては、さらに、次の様な事情が関与していた。抑々ハプスブルク帝国にあっては資本主義の発展が比較的遅く、その結果、金融・商業資本＝流通資本の優位という特色が生じただけでなく、工業に於いては、外国資本の流入等による大規模工業化が一部で見られる半面、広汎に小営業層が存続することとなった。[50] 中でもウィーンは、食品工業など一部を除いては、偉侈品産業も含めて、中小営業層とそれに連なる小商店主層が圧倒的に多かった。[51] 一八七三年の恐慌以来、苦境の中から政治的に積極化して、八三年には営業法改正を、九五年にはルエーガーの市長当選を成功させてきた彼らにとって、ウィーンの「都市社会主義」は、社会主義であっても、彼らの利益に抵触するものではなかった。事態はむしろ逆である。まず、ガス工場にしろ、発電所にしろ、市営化は既存の大工場の利益を侵害はしても、中小営業層の競争相手となって彼らを脅やかすものではなかったし、外国資本が借款の形で流入する結果になったとは言え、とも角それも、当面の敵「ユダヤ資本」に対抗してなされたのであった。しかも、それどころか、ガス工場、発電所、その他の市の施設、そしてとりわけ上水道建設は、彼らに新たに受注の機会を与え、生計の道を保証する意味を持っており、まさに中小営業層にとっての「経済政策」であったから、彼らが双手を上げて支持したのはむしろ当然だったのである。[52] その点、一九〇五年五月、キリスト教社会党系の新聞「帝国報知（ライヒスポスト）」紙上で、P・レーンなる人物が、「都市所有化の理念にのっとって行われたルエーガーの自治体主義（＝「都市社会主義」

と読んで可。）は、一言で言えば、中間身分政策である。」と述べているのは、蓋し正鵠を射ている。(53) つまり、ルエーガーの「都市社会主義」は、Shoppocracy の担い手の為の利益政治という性格を色濃く持ってもいたのである。

特定の社会層なり集団なりを受益者とするルエーガー市政の特質は、やはり彼がウィーン市政史上初めて第一歩を踏み出したとされる「社会・福祉政策」において一層顕著に、そして独特の色彩を帯びて現われる。そこで、次に、この分野に光を当ててみることにしよう。

註

(1) F. Czeike, Wien. Geschichte der Stadt Wien / München / Zürich, 1981. S. 233-236

(2) R. Kuppe, Karl Lueger und seine Zeit. Wien. 1933. S. 377-383 以下 R. Kuppe. ②と略記。
ルエーガーの下でウィーン行政は、従来の一八局に、新たに健康局、食料購入局、市営事業局を設け、さらに救貧課を局に格上げすることで、一二局体制として整備された。R. Till. Geschichte der Wiener Stadtverwaltung, Wien, 1957. S. 101-102.

(3) F・チャイケは財政政策、経済政策、社会政策に三分して分析しているが、ここでは本文にあるように経済政策の中に財政も含め、又、福祉政策を社会政策と一緒に考察している。cf. F. Czeike, Liberale, Christlichsoziale, und sozialdemokratische Kommunalpolitik (1861-1934). Wien, 1962.
尚財政項目もそれ迄の一三から二三へと細分され、透明度を増した。財政規模は一八九二年の三〇七五万グルデンから一九一一年の二億七九六六万クローネへと大巾に増大している。ibid., S. 66-67

(4) J. Güntner, „Die Wiener Städtischen Gaswerke." in: R. Tillmann. Hrsg. *100 Jahre Wiener Stadtbauamt 1835-1935*, Wien 1935. S. 361. 一八九〇年以来ＩＣＧＡとの間で工場買収の交渉が試みられたが、契約を盾にとるＩＣＧＡの強硬姿勢から、市は買収に失敗している。R. Kuppe, Lueger, Wien, 1926. S. 9. 以下 R. Kuppe ①と略記。

(5) R. Kuppe ② S. 387-391

(6) K. Skalnik, Dr. Karl Lueger. Der Mann zwischen den Zeiten. Wien. 1954. S. 116
(7) H. Schnee, Karl Lueger. Leben und Wirken eines großen Sozial-und Kommunalpolitikers. Berlin, 1960. S. 73-74
(8) ルエーガー自身、ロートシルト家を中心とするユダヤ人の妨害について度々言及している。ヒトラーの理解もおそらくそこから来ている。F. Stauracz, Dr. Karl Lueger. Zehn Jahre Bürgermeister. Wien / Leipzig. 1907. S. 61
(9) R. Soukup, Lueger und sein Wien. Wien. 1953. S. 42
(10) 新市街（XI—XIX区）では私企業との契約期間が残っていたため、市営化は一九一一年を待たなければならなかった。H. Schnee. op. cit., S. 75. 尚、配管工事については、細かい工区に分割して、多数の中小業者に請け負わせている点が注目されてよいであろう。
(11) 照明装置も古い平焔灯から明るいアウエル灯に替えられた。J. Güntner, op. cit., S. 364-369.
(12) R. Spitzer, Des Bürgermeisters Lueger Lumpen und Steuertröger. Wien. 1988. S. 152-154. 九九年一〇月二四日のルエーガーの誕生日には支持者を動員して、ガス工場完成を祝う炬火行列が行われている。F. Stauracz, op. cit. S. 61-73.,
(13) P. Brzekoupil, Die Kommunalpolitik unter Dr. Karl Lueger. *Diplomarbeit der Wirtschaftsuniversität Wien 1976*. S. 6-8
(14) ストの交渉の席にはウィーン市長としてルエーガーが立ち会っている。R. Kuppe, ② S. 393.
(15) J. Hawlik, Der Bürger Kaiser. Wien, 1985. S. 117
(16) F. Czeike, „Festschrift: 100 Jahre elektrische Tramway in Österreich." in: *Wiener Geschichtsblätter*. 1983. S. 6-7
(17) R. Kuppe, ② S. 394
(18) R. Soukup, op. cit. S. 56.
(19) R. Kuppe. Dr. Karl Lueger, Persönlichkeit und Wirken, Wien, 1947. S. 104
(20) R. Beron, „Die Wiener Städtische Elektrizitätswerken" in: *100 Jahre Bauamt*. S. 377-379.
(21) F. Stauracz, op. cit., S. 75
(22) R. Beron, op. cit., S. 380. 市と契約していた私人に対し、民間電力会社が新たな供給契約を結ぼうとすると、ルエーガーは市の消防隊を派遣して実力で阻止することもやったと言う。R. Soukup. op. cit., S. 59.

尚、電力事業の収支は、一九〇八年について見ると九三〇万クローネの支出に対し、一三五〇万クローネの収入となっ

ている。

(23) ウィーン市の飲料水は古くは泉と井戸で間に合わせていた。一八四一年、初の水道としてフェルディナント皇帝水道がドナウ河上流の河沿いに作られ、さらに七三年、遙かシュネーベルクから泉水をひく所謂第一上水道が作られていた。ルエーガーの作った水道は第二水道と呼ばれることになる。L. Machek, „Die Wiener Wasser Versorgung." in: *100 Jahre Bauamt*. S. 250-251.

(24) R. Soukup. op. cit., S. 66

(25) R. Kuppe. ① S. 23-24

(26) L. Machek,. op. cit., S. 253-5

(27) R. Kuppe. ② S. 406

(28) J. Mattis, „Die Abwasserbeseitigung Wiens," in: *100 Jahre Bauamt*. S. 258-262. 我々にとってはC・リードの映画「第三の男」でなじみ深い下水道の完成である。

(29) F. Stauracz, op. cit., S. 80

(30) R. Kuppe. ② S. 414

(31) ibid., S. 413

(32) ○五年一月、V区で開かれた選挙人集会での発言。F. Stauracz, op. cit., S. 83

(33) L. Tomola, Dr. Karl Lueger. Wien, 1904. S. 34. 他に、穀物倉庫、冷凍倉庫なども建てられた。
全体として見れば、この間食料品の値上がりは一貫して続き、ルエーガーのウィーン市だけの措置では効果が薄かった。物価上昇に対する自衛措置として作られた生活協同組合も、ルエーガー支持派の小商店層の反撥にも拘らず、この間七倍に増加している。R. S. Geehr, Karl Lueger. A Biography of Political Tradition. Wayn. 1989. pp. 147-8.

(34) F. Stauracz, op. cit., S. 88

(35) R. Kuppe ② S. 400

(36) フランツ・シューマイアーはJ・ロイマンと共に社会民主党出身で最初にウィーン市議会に選出された人物である。このルエーガーの発言は社民党に対する挑発と解することができる。シューマイアーについては、さしあたり、E. K Herlitz-

ka, „Franz Schumeier" in: *N. Leser (Hrsg.) Werk und Widerhall. Wien, 1964.* S. 362-373. を参照。

(37) F. Stauracz, op. cit., S. 87-89.

(38) R. Kuppe ① S. 30-31

(39) 言うまでもなく、ここで問題になっているのは厳密な意味での社会主義ではなく、都市機能のうち、重要部分の幾つかを私企業の手から自治体に移す「ガスと水道の社会主義」に過ぎない。J. R. Kellet, „Municipal Socialism, Enterprise and Trading in the Victorian City," in: *Urban History Yearbook,* (1978),

(40) H. Andics, Luegerzeit. Das Schwarze Wien bis 1918. Wien / München, 1984. S. 396

(41) P. Brzekoupil op. cit. S. 75-76.

(42) R. Knoll, Zur Tradition der Christlicksoziale Partei, Wien / Köln / Graz, 1973. S. 173-176.

(43) Verw. -Ber. 1908. S. 61-62

(44) ibid., S.64. F. Czeike, Liberale, Christlichsoziale, und Sozialdemokratische Kommunalpolitik, Wien, 1962 S. 70-71

(45) A. Briggs, Victorian Cities, Hamondsworth, 1968. PP. 184-240.

(46) M. Seliger / K. Ucacar, Wien. Politische Geschichte 1740-1934. Teil 2. Wien / München, 1985, S. 964-970.

(47) 上水道建設の際の独断専行がその意味で象徴的である。

(48) 実はガスの市営化ではプラハが、市内交通電化ではブタペストが、それぞれウィーンに先んじており、ルエーガーはそれに対して殆んど子供じみた対抗心を燃やしていた。R. S. Geehr, op. cit., P. 150. 〇七年にはブタペストからの郵便物でドイツ語で書かれていないものは受取を拒否するよう指令を出している。Verw. -Ber 1907. S. XX.

(49) ルエーガーの四〇〇万都市構想の中には地下鉄敷設、大ドナウ港建設、ドナウ・オーデル運河開削等の大型プロジェクトも含まれていたが、実現を見なかった。R. Kuppe. ② S. 379-381 フランツ・フェルディナントとルエーガーの関係については、H. Andics. op. cit., S. 312-315. を参照。

(50) H. Matis, Österreichs Wirtschaft 1848-1913., Berlin, 1972, S. 22-30

(51) R. B. Schweizer, Industriestadt Wien, Wien, 1983. S. 33-38

(52) R. Kuppe. ② S. 399-400. 市内交通の整備にしても、郊外地域の家賃を上昇させる効果があり、ルエーガーの支持層であ

る中・小家主を潤した。P.Feldbauer. Stadtwachstum und Wohnungsnot. Wien, 1977, S. 48-49

(53) F. Stauracz, op. cit., S. 56-57.